

HF-OCT における造影剤使用量の検討

¹医療法人 春林会 華岡青洲記念病院、²医療法人 春林会 華岡青洲記念病院
井口 琴音¹、竿崎 佑弥¹、奥田 正穂¹、平田 和也¹、管家 鉄平²、華岡 慶一²

現在、PCI において使用可能な OCT は 3 社あるが、OCT のプルバックの際は血球除去のため主に造影剤が使用される。そのため使用には、造影剤使用量増加の懸念がある。

2024 年 11 月より当院でも使用を開始した、ニプロ社製 HF-OCT（以下、HF-OCT）のカテーテルは 1.8Fr と他社の OCT カテーテルより細く設計されていることや、高速プルバックができる特徴がある。HF-OCT カテーテルは、他社の OCT カテーテルでは血球の排除が不十分になり OCT 画像の描出が困難であった症例でも、使用可能であることを以前報告した。

そこで今回、当院で施行された PCI 症例を対象に、HF-OCT 使用群と他社 OCT 使用群に分け、プルバックに使用する造影剤量を比較・検討したため考察を含め報告する。

2024 年 11 月以降の HF-OCT と他社 OCT を RCA・LAD・LCX に分類し、各プルバックによる造影剤使用量と注入速度を比較した。尚、手技のばらつきをなくすため特定の医師のみによる症例とした。

各病変における、プルバックの際の造影剤使用量、注入速度に関しては大きな差は認められなかった。しかし、HF-OCT 使用例では病変によって造影剤の通常使用量より少ない症例や、高度狭窄病変においても通常使用量でプルバック可能である症例もあった。

当院では HF-OCT、他社 OCT に造影剤の使用量に大きな差は認められなかったが、症例によっては HF-OCT の利点を活かし、造影剤の使用量を抑えることができる可能性が考えられた。